

目次

凡例

〔京への旅〕

あづまぢの道のはてよりも	二	継母なりし人は	六
門出したる所は	三	その春世の中いみじうさわがしうて	元
十七日のつとめて立つ	四	かくのみ思ひくんじたるを	二
そのつとめてそこを立ちて	五	五月ついたちごろ	三
今は武蔵の国になりぬ	六	物語の事を	三
野山蘆をぎのなかを	九	三月つごもりがた	三
足柄山といふは	一〇	花の咲き散るをりごと	三
まだあかつきより	一一	世の中に長恨歌といふ文を	三
富士の山はこの国也	一二	その十三日の夜	三
富士河といふは	一三	そのかへる年	三
ぬまじりといふ所も	一四	その五月の朔日に	三
それよりかみは	一五	そのほど過ぎて	三
をはりの国鳴海の浦を	一六	雪の日をへて降るころ	三
粟津にとゞまりて	一七	かへる年睦月の司召に	元
		四月つごもりがた	元
		念仏する僧の	三
		あかつきになりやしぬらむ	三
		八月になりて	三
		京にかへり出づるに	三
		十月つごもりがたに	三
		旅なる所に来て	三
		継母なりし人	三

〔身ひとりの頃〕

ひろく荒れたる所の	一七	そのかへる年の十月廿五日	元
かやうにそこはかなきことを		二三年四五年へだてたることを	元
親となりなば	二	二年ばかりありて	元
七月十三日にくだる	三	又初瀬に詣れば	元
八月許に太秦にこもるに	四	いにしへいみじう語らひ	元
冬になりて	五	三月のついたちごろに	元
あづまより人來たり	六	うらくとのどかなる宮にて	元
かうてつれなくとながむるに	七	おなじ心にかやうにいひかはし	元
母一尺の鏡を鑄させて	八	さるべきやうありて	元
親族なる人	九	世の中にとにかくに	元
あづまにくだりし親	一〇	九月廿五日より	元
東は野のはるくあるに	一一	さすがに命は	元
十月になりて京にうつろふ	一二	をひどもなどひと所にて	元
師走になりて又まゐる	一三	年月は過ぎかはりゆけど	元
ひじりなどすら	一四		元
十二月廿五日	一五		元

〔弥陀のひかり〕

かう立ち出でぬとならば	一六	解説	八三
そののちは何となく	一七	年譜	八三
冬になりて	一八	和歌初二句索引	一〇四
上達部殿上人などに	一九	地図	一〇六
今はむかしのよしなし心も	二〇		

〔京への旅〕

一 古今和歌六帖第五、紀友則「あづまぢの道の果てなる常陸帯のかごはかりも会ひ見てしがな」による。父孝標が寛仁元年（一〇一七）、作者十歳の折に上総介として赴任したのは動物に見える。「あづま路」は東海道。

二 作者の実母は京に残り、孝標の別の妻、高階成行女が同行した。帰京後この継母は孝標と離婚し、宮中に出仕したが、孝標の官職名を冠して、上総大輔と称した。後拾遺集（一首）歌人。

三 「光源氏」は源氏物語の呼称にも用いられるが、ここは、その主人公。

四 書物としての物語がここにはないので、かつて都で読んだのを暗記して、祈願する者と同じ背丈の意とも。

五 仏教が中国に伝わった時の普通の人の背丈の五尺ともいう。

六 「薬師」の文字を宛てることから、衆生の病患を救う仏とされるが、本来現世的な諸願を以て、利益を与えるとされる。薬師瑠璃光如来。

七 孝標が上総介の任果てた寛仁四年（一〇二〇）に、数え年「十三」とあるので作者の生年が推算される。

八 門出は吉日を選ぶ必要がある、実際に出発したいと思う日と一致しない場合が多い。その時は、ひとまず佳い日に家を出て、他の知合いの家か、別に

一 あづまぢの道のはてよりも、猶おくつかたに生ひいでたる人、いか許かはあやしかりけむを、いかに思ひはじめける事にか、世（の）中に物語といふ物のあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人ぐの、その物語、かの物語、ひかる源氏のあるやうなど、ところく語るを聞くに、いとゆかしさまされど、わが思ふまゝに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきまゝに、等身薬師仏をつくり



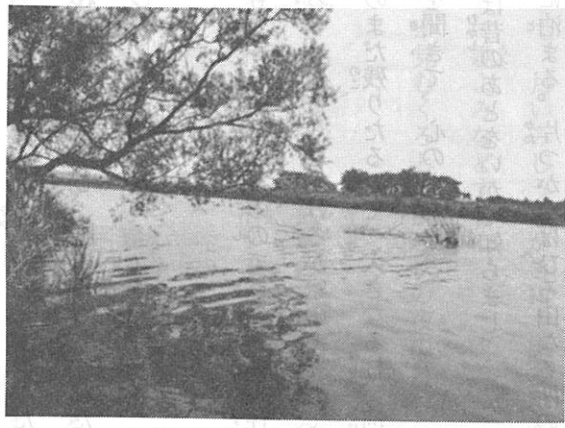
に仮屋を設けて移るのである。蜻蛉日記「日あしければ、門出ばかり法性寺のあたりにして」。

九 「いまたち」は作者の住居であった国府に近く近いと思われるが、今の千葉県市原市馬立（今は「うまたて」という）あたりとする説がある。しかし帰路に対して、戻る位置にあるのが疑問。また、新たに設けた別館の意の新館、あるいは「いま発ち」を掛けた表現かとする説もある。

一〇 建具や調度類をすつかり取り除いてしまうので、外から家の中がまる見えになって、「毀つ」は清音。

一一 部と書き、通常の建物で、風雨を防ぎ目をささぎる板戸。四つ目格子に板を張り、吊り上げたり、はずしたりする。

て、手あらひなどして、人まにみそかに入りつゝ、京にとくあげ給（ひ）て、物語のおほく候（ふ）なる、あるかぎり見せ給へと、身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。



上総国府跡付近を流れる養老川

一 南に平原が広がり、東と西とに海が近いとは、北方につき出した岬か。

二 主に白いもの、明るいもの、広々としたもの、または音楽などに接して感じるはれやかな気持。

三 定家筆の底本には「しもつけ（下野）」と書かれているが、誤りなので「しもつき」と改めた。

四 「いかだは池田の転かという。今の千葉市寒川一帯の古名を池田郷といった。また「庵なども浮きぬばかりに雨降り」とあるのに呼応して、「筏」を掛けた表現かとする説もある。

五 後年の二度目の初瀬詣でも見ら

年ごろあそび馴れつるところを、あらはにこほち散らして、たちさわぎて、日の入りぎはの、いとすぐきりわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まにはまゐりつゝ、額をつきし薬師仏のたち給へるを、見捨てたてまつる悲しくて、人しれずうち泣かれぬ。

門出したる所は、めぐりなどもなくて、かりそめの茅屋の、しとみなど